

いなば しろ

とっとりけんいなばちほう はなし

「因幡の白ウサギ」 鳥取県因幡地方のお話

おおむかし たかくさ こおり けた さき ちくりん
 大昔、高草の郡の氣多が崎に竹林があつてなあ、その竹の中
 としよ
 に、年寄りウサギが住んどつただつて。

とき おおみず
 ある時、大水が出て、竹林は水につかつてしまつたつてな。

ね あら
 ごつつい波が竹の根を洗つたもんだけえ、土が掘られて、くずれ
 の
 だし、ウサギは竹の根に乗つて、海へ流されて、とうとう隠岐の島
 うみ なが
 へ流れついたのでつて。

かえ
 ウサギは氣多が崎へ帰りたいなあど、思い思いして、故郷の方
 おも
 を見るじゃけど、海があつて越すことができん。はて、どがあにし
 み
 たらええかと、海のほとりを、うろろ歩きよつたら、ワニが一匹、
 ある
 岸辺に浮いてきたで、そうだ、ええことがある。こいつを使つてや
 きしべ う
 つか
 れ、て思つて、

「ワニさん、ワニさん、お前の仲間なんぼうおるか」
 たず
 て、尋ねただつて。

「ようけいおる。海がいつべえになるほどおるわいな」

「いんや。ウサギの方が大勢おおぜいだもしらん。わしの仲間なかまは山やまがいつぺえになるほどおるわい。ひとつくらべあいこをしようだあないか。

お前まえ、仲間なかまを呼よんできて、気多きが崎さきまで、並ならんでみい」

「ほんなら、連つれてくる」

と言って、ワニは仲間なかまをようけい呼よんできた。ほんに向むこうの岸きしに届とくだけ集あつまってきただつて。因幡いんぱんの白ウサギは、

「なら、わしが数かずえるけえな」

と言って、ワニの背中せなかを踏ふんでは、ひょんひょんひょんひょん跳とんで数かずを数かずえていったのはええが、もうひと足あしで陸地りくちに上あがるという時ときに、後うしろを向むいて、

「ああ、ええことをした。こっちの岸あに上あがりたかつたもんで、お前こらをだまして、ここまで来こられたわい」

て笑わらっただつて。さあ、ワニが怒おこったのなんの、一番端いちばんはしのワニが

ウサギを引ひつかまえて毛皮けがわをくるくるっとはいでしまった。

ウサギは赤裸あかはだかにされただけえ、痛いたあて痛いたあて泣なきよつたら、そこへ大勢おおぜいの神かみさまが通とおりかかって、尋たずねられただつて。

「ウサギ、なんで泣なくか」

「こーこーいうわけで、ワニに皮かわをはがれて、痛いたあてこたえん」

「ふん、そりゃあ困ったのう。ええことを教えてやる。行って、海の水を浴びて、高い山の風の吹く所へ行って、寝とれえ」

と言って、嘘を教えて、行ってしまったって。大勢の神さまというの
おおくにぬしのみこと きょうだいがみ
 は、みんな大國主命の兄弟神で、どの神さまも、因幡の八上姫
やがみひめ
 と結婚したいもんだと思って、訪ねて行くところだって。八上姫は
けっこん
やかみのこおり ごうぞく むすめ
 八上郡の豪族の娘で、そのころ大した評判の姫だったと。

ウサギはよろこんで聞いて、いわれたとおりにしたところが、海
しおみず
 の塩水に入りやあ、ぴりぴりするし、風に当たりやあ、なおのこと
かぜ あ
 ぴりぴりしてかなわん。こらえきれずに泣きよったら、そこへ
な
おおくにぬしのみこと とお
 大國主命が通りかかられただって。大國主命は兄弟神の荷物
きょうだいがみ にもつ
 を負おわされたもんだけえ、後あとから遅おれて行かれとっただってなあ。
 「ウサギ、なんで泣くか」

て聞かれるだけえ、ウサギが泣き泣きいままでのことを話したら、
おおくにぬしのみこと
 大國主命は、

「すぐ川口かわぐちに行いって、川の水で、ようにお前からだの体あを洗あらうがええ。
 そがしたら、川はに生はえとるガマの穂ほをしほいで、その上うえに
ころ
 転ころんどってみい。かならずなおるけえ」
 て言いわれた。

ウサギがよろこんで、言われたとおりにしたところが、痛みも
なおるし、毛も元のままだに生えただって。

これが因幡の白ウサギで、ウサギはその時に、

「先の兄弟神さまたちは八上姫と結婚できん。たとえいまは
袋を負うとつても、大国主命が八上姫をめとられるだろう」

って言っただって。